七人の召集兵

福岡市南区　　宗　丈夫

昭和１６年、１７年当時は、召集令が最も多く発令されていた。昭和１６年１１月に少尉に任官した私は、久留米の西部５４部隊で次々召集されてくる補充兵の訓練に明け暮れ、昭和１７年の春になると、これらの召集兵の訓練で連隊中、多忙を極めていた。

１日の訓練が終わり、消灯ラッパが哀愁を帯びた余韻を残して日中の喧噪（けんそう）が静まると、連隊中は静かな眠りにつくのである。静まり返った当直室に、疲れた体を休めようと横になったころ、ドアをノックする者がいる。「何だ」と言うと、小声で「教官殿に話があって参りました」と返事するので「よし、中隊事務室で待っておれ」と言って服を着て行くと、村山二等兵（仮名）が「教官殿聞いてください」。「聞こう」と言っていすをすすめると、彼は次のような話を始めた。

「私には親兄弟も親戚もありません。天涯孤独であります。そして家内も私と同じ様に天涯孤独であります。その様な互いの孤独を慰め合ううちに結婚しました。私は家具職人です。福岡市内で小さな家具店をもって、細々とやっています。二人の間に４才、２才と、生まれたばかりの赤ん坊と五人暮らしです。

一番下の赤ん坊が生まれた時から家内は産後の肥立ちが悪く、子供の世話と家内の世話と家具店を、私一人で何とか切り回していました。家内は寝たきりで、恥ずかしい話ですが、下の世話まで私はやっていました。そこへ召集令が来ました。

町内会長さんは『後のことは心配するな。お国のために、しっかりやって来てください』との挨拶で、旗と歓呼の声に送られて入営しました。いずれ戦地に行くことでしょうが、病に伏せている家内や乳のみ子を抱えて、一体どうやっていけるのでしょうか。家内の下の世話まで、一体誰ができるのでしょうか。

先にも言いましたように、一人の親戚もいないのに、三人の子供の世話をこの先、誰がやってくれるのでしょうか。それを考えると消灯ラッパが鳴っても眠れません。教官殿、どうしたらよいか教えてください。」と涙を拭うのである。

私は言葉を失った。省みて私自身２５才であったし、このような不幸な立場の人がいることも、漠然とした想像の中にはあるにはあったが、目前に突きつけられてみると、急には対応できないのであった。

「よし分かった。考えてみよう。今夜は帰って休め」と言うのが精いっぱいであった。私には深刻な人生経験もなく、平凡にして幸せに今日に到っていたからであった。

私にとって驚きの経験であり、このような召集兵の訴えが毎晩のように私の当直室のドアーをノックしていた。

コンコン……。「教官殿に聞いていただきたいことがあります」。

「中隊事務室で待っておれ」。そしてまた、彼等の訴えを聞くのであった。

Ａ二等兵であります。今日、友達が私に面会に来ました。彼の話では、昨日、私の家を訪ねてみると、私の３才になる娘が米びつに手を突っ込んでご飯を食べているので『母ちゃんは』と聞くと『別府にいっとんしゃあ』と言い、『母ちゃんは何日来ると』と言うと、『知らん』と言って、おかずもなく米びつからご飯を手づかみで食べていたーと聞いて昨夜は眠れませんでした。

この娘は私にとっては目に入れても痛くないほど可愛く、先妻の子で、今の家内はカフェで働いていた時知り合ったのです。それで、少しも娘を可愛がってくれません。私が家にいる時は私が可愛がるのでいっこうにかまいませんが、召集されて戦地へ行ったら、娘がその様な状態では、私は心配で眠れません。いっそ不憫（びん）な思いで悩むより、ひと思いに殺して、その骨を私の胸に抱いてなら、どこの戦地へ行っても、心おきなくご奉公できます。どうか明日、私を外出させてください。」と言って涙ぐむのであった。

「冗談じゃないぞ、そんな事ができるか。それより明日、女房に面会に来る様に手紙を書け、そして、俺が会って、この非常時に不心得を諭してみよう。お前の女房も出征兵士の妻として反省するに違いない」と言って帰した。

コンコン…。またしても消灯ラッパ後の来訪である。

「私は百姓をしております。村の人達は後のことは心配するな、と言って送り出してくれました。出征兵士に家の田畑は皆、村の人たちが手伝ってくれますので、その点は少しも心配していません。実は私のことであります。私は坐骨神経痛の持病があります。

ひどく痛み出すと、あぜ道でもどこでも寝込んで、痛みが去るまでじっと我慢しています。しばらく休んで痛みが去ると、また畑仕事をしていました。ご覧の通り、私は外見上は頑丈な体です。この病気は外からでは分かりません。訓練中に痛み出しますと、班長殿は『ばかんまねするな！！』（軍隊用語で仮病のこと）と怒鳴られます。

もう死の苦しみです。何か腰掛けてできる作業はないでしょうか。演習訓練はとても耐えられません。私も召集された以上、ご奉公したいと覚悟して来ましたが、このままではお役に立ちそうになく、特に、班長殿ばかりでなく、戦友達まで私が“ばかんまね”をしとると思つとるとです。どうしたら本当のこの痛みをわかってもらえるのでしょうか」と、必死に訴えるのであった。

召集兵、約五百人のうち、毎晩、私の部屋のドアをノックして、それぞれの苦境を訴えるのであった。私も初めて、世の中の人々が色々の十字架を背負っているのに驚かされ、その対応を迫られていた。人生経験の浅い２５才の陸軍少尉に一体、何ができるのであろうか。

こういう夜が続くと、今度は私が眠れぬ夜を送る事になった。いくら考えても、多くの人たちの苦難の訴えを解決するための深い人生経験を持たない私は、考え込んで、目野中隊長に相談した。中隊長は腕を組んで考え込んでしまった。よい考えは浮かばなかったが、池田部隊長へ相談に行く許可を取り付けた。

池田部隊長は温顔誠実な方であった。

私は兵隊と同じように、部隊長のドアーをノックした「部隊長にお願いがあって参りました」「何かね」と、優しく問われる部隊長に、毎夜の召集兵の訴えの件を話した。部隊長は「何かいい考えはないのか」と言われるので、私は「これらの召集兵のうち７人を厳選して、召集解除する以外にないと思います」と答えた。「召集解除か。そんな特例でもあるのか」と言われるので、「病気で軍務に耐えざる場合、部隊長殿は召集解除ができる規定があります」と言うと、「病気か。軍医と相談してみろ」とのことであった。

直に軍医のところに行って事情を話すと、軍医は「わかった。しかし、ことは重大だから、ほかの召集兵に分からないようにせねばいかんなあ」「その点は十分気をつけます」と言って、７人の召集兵に「結核既往症に付、軍務に不適」なる病名をつけてもらった。

『申告　陸軍二等兵　村山常雄は結核既往症の為即日帰郷を命ぜられました。慈に謹んで申告致します』

以下、７名の召集兵とも、同様の申告を、私教官、中隊長、そして部隊長殿に申告した。私に申告する７人の兵は、涙を流しながら申告を終わった。部隊長殿のところへ７人を引率して同様の申告を終わると、部隊長殿は優しく「お前達は家へ帰ったら早く病気をいやすよう」と訓示された。

この部隊長はその後、連隊を率いて５６師団に属してフィリピンからビルマへ出征された。かくいう私も、輸送指揮官としてこれら４５０人の補充兵を引率して戦地へ出発した。昭和１７年８月１８日のことであった。

門司港から輸送船に乗り込んだ人たちも、それぞれの苦難を訴えることなく戦地へ向かったのである。もう古びてしまった村山常雄二等兵の手紙を見ながら、もう５０年もたった当時を偲（しの）んで懐かしむだけでなく、あの７人はどうしただろうと思うこのごろである。